ESC (European Society of Cardiology) Preventive Cardiology 2025 in Milan

初めての国際学会での発表を経験して

現在、私は宮崎大学大学院医学獣医学部修士課程に在籍しています。卒後 10 数年、臨床を続けるなかで研究経験の乏しさに危機感を抱き、一から学び直す覚悟で宮崎大学大学院の海北研究室の門を叩きました。社会人学生として、日中は医療機関で臨床業務、夜は授業や研究活動に取り組む生活を送っています。

この度、イタリアのミラノで開催された ESC Preventive Cardiology 2025 で発表する機会を頂きましたのでご報告させていただきます。

この学会は、欧州予防心臓学会（EAPC）が主催しており、心血管疾患の予防とリハビリテーションを専門とする欧州心臓病学会（ESC）の分科会です。「Risk factor realities（リスク要因の現状）」をテーマに、この数年でリスク因子がどう変化したか、また、新たなテクノロジーの応用がどう進んでいるかについて、活発な議論が展開されていました。

2024 年 10 月、松浦准教授から「心臓リハビリテーション学会の ESCPC 優秀演題賞の応募をしてみたら？」と声をかけていただいたのがきっかけでした。ご指導いただいている先生がこれまで地道に蓄積してきたデータを新しい視点で解析したところ、興味深い結果が得られ、限られた時間の中でなんとか抄録を作成し、慣れない英語に苦戦しつつも、締切ギリギリで応募にこぎつけました。

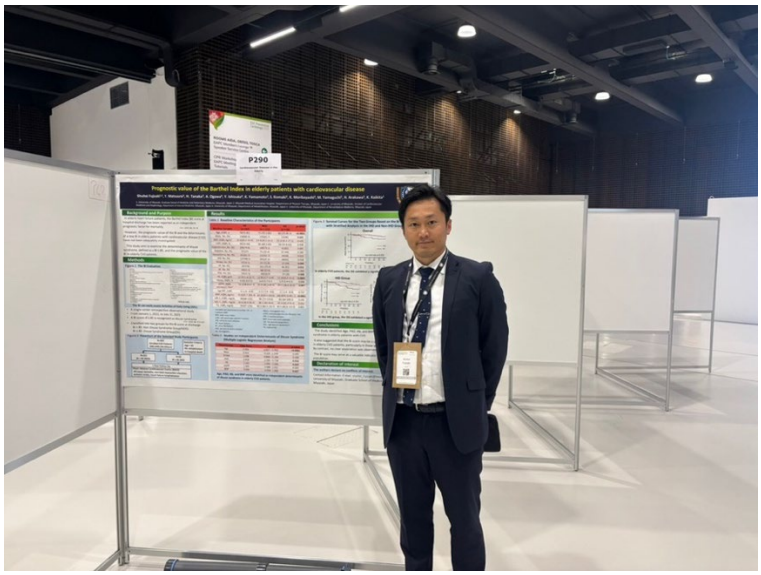
それから３ヶ月後の忘れかけていたある日、「Congratulation!」という文面で採択の通知が届き、嬉しさと同時に英語への不安が押し寄せましたが、貴重なステップアップの機会ですので挑戦を決意しました。学会まで残り２ヶ月半は、英語の勉強や旅行の準備であっという間に過ぎて行きました。

ミラノまでは直行便があり、北極圏を通る（ロシアを迂回する）航路のため、約 14 時間のフライトです。窓側座席を確保してオーロラを見るぞと意気込んではいたもののいつの間にか寝てしまい、結局見られませんでした。隣席の方がよくお仕事でイタリアに出張なさるとのことで、お土産情報をしっかり収集し、旅行気分でイタリアに到着しました。空港から市内までは電車での移動でしたが、駅員さんに存在しない 5 番ホームに行けと言われ（その後 2 番ホームから電車が出ることがわかりなんとか乗車できました）、早速イタリアの洗礼を受けることになりました。街中は独特の匂いと埃っぽさ、高い便座、歩きタバコ（喫煙率も高いように思います）など異文化に驚きつつも、すぐに馴染んでしまうのが旅の不思議です。

学会の印象は「自由で開放的」でした。皮つきリンゴにかじりつきながら歩く人もいて、日本の学会とはまるで違いました。

WELCOME
ESC Preventive Cardiology 2025
3-5 April
Milan, Italy
VIALE
LODOVICO SCARAMPO

Clinical Case Corner



ポスター発表も形式張らず、参加者は発表タイトルやキーワードを見て興味のあるブースに立ち寄り質問するスタイルでした。一人での参加ということもあり緊張もありましたが、想定質問をまとめて“お守り”のように握りしめて臨みました。発表を無事に終えたことは大きな自信になりましたが、英語力の壁は、やはり大きな課題です。準備期間に ESC TV をシャドーイングしていたこともあり、少しはリスニングに自信がありましたが、やはり短期間では十分ではなく会話に苦労しました。イタリア語と英語が交錯する日々で、脳も疲労気味…。やはり、日々のインプットとアウトプットの積み重ねが必要だと痛感しました。会期中は、世界で活躍する日本人の先生方の堂々たる英語発表に大いに刺激を受け、「自分もあのステージに立てるようになりたい」と心から思いました。また、研究材料は毎日の診療現場にあり、しっかりとデータベースに蓄積していけば世界に向けて研究成果をアピールできるということがわかったことは大きな収穫です。

学会後はフィレンツェやヴェネツィアを駆け足で巡り、リフレッシュもできました。帰国後は体調を整え、次は英語論文執筆に挑戦したいと思います。

BOOK STORE
and
SOUVENIRS

最後になりますが、このような機会を与えてくださった海北教授、演題作成から添削までご指導くださった松浦准教授、田中先生、そして出張中に病棟業務を支えてくださった職場のスタッフの皆様に、この場をお借りして心より御礼申し上げます。

この経験を若い世代に引き継いでいけるよう、今後も全力で取り組んでいきます。ありがとうございました！

宮崎大学大学院医学獣医学部修士課程 2 年　藤﨑修兵